

# 末黒野

すぐろの

創刊七十周年記念号 4月号 (通巻836号)



# 年詰まる

小川 玉泉

(名譽主宰)

海原へ翼を拡げ初日出づ

闇を裂く鳥の三声年立ちぬ  
海原へ翼を拡げ初日出づ  
口中に満つ三陸の酢牡蠣の香  
煮凝に味深まりぬ真子鰈  
風花のしきりや姉の小祥忌  
本堂の凍てほぐすかに木魚の音

大晦日になると、気になるのが元朝の天気である。今年の天気は快晴で絶好の日の出日和になった。国道134号線の鶴沼歩道橋の上が絶好の観測地点である。東に連なる三浦半島の逗子あたりに顔を出す初日は、ゆっくりと海を染め、急に赤い翼を拡げた。荘厳の一瞬であった。

# 初 明 り

松本三千夫

磴 五 十 雪 洞 二 百 初 詣

去年今年星それぞれの位置に座し

一湾の凧ぎて遠富士初明り

江ノ電を二駅歩き初日の出

方丈の大屋根に二羽初雀  
はたはたと羽音ゆたかや初鴉  
ネクタイを締めて句会へ松の内  
人日や妻の重みの籐寝椅子  
倒れ木の山道塞ぐ青木の実  
万年筆走る便箋寒灯  
冬波の夜目にも白し久女の忌  
眠れぬ夜森に貼り付く枯木星

# 地球儀

黒滝志麻子

(副主宰)

地球儀に戦火などなし注連飾  
ひと軋みして海へ向く初電車  
ひたひたと波打つ渚初明  
一山を浄土と鳴けり初鳥  
一島を置く一湾の淑気かな  
花時計の三時を指すや冬すみれ  
枯葦の倒れきつたる安堵かな  
約束のごとく笹子の鳴きてをり  
鳥容れてひかり一すぢ枯葎  
鶏小屋の裸電球寒波来る  
寒晴れや机上清めてより書けず  
大寒の森一塊となり昏るる

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 初夢

松田泰子

数へ日の餅をしづかに焼いてをり  
裸木に凜と山影立ちにけり  
極月の黒き川面を覗きゆく  
石路咲くや海見ておはす仏たち  
山茶花の優しさに消ゆわだかまり  
笹鳴の離ればなれに日暮れけり  
山肌に山の影くる冬紅葉  
凧を呼ぶ木となれり老いがたく  
ことごとく枯れことごとく雑木山  
初夢のさめてふるさと遠ざかる

## 浮寝鳥

森清堯

枯葎色に優劣なかりけり  
枯野原分け入る人の背の広し  
冬ざるる苑や鴉声のほしいまま  
枯櫂黙の力を広げをり  
浮寝鳥水の眠りを誘へり  
踏み込んで強き弾力冬の草  
万歩来て寒紅梅の一二輪  
若水の手よりこぼるるひかりかな  
元朝のかがやき残す二十日月  
常ならぬ温さたまはる三日かな



## 暈の目

森清信子

七十周年迎ふる俳誌初御空  
元日や聖書の葉新しく  
初富士や松が枝移る尾長鳥  
初東風や磨きぬかるる連子窓  
野の草のやうに生きたしごまめ噛む  
放たるる鶏に怯む子花八手  
合掌造り粗く冷たき暈の目  
白鳥の暮色引き合ふ瓢湖かな  
臘梅の大樹にむせて長屋門  
流れゆく冬霧に山沈みけり

## 冬の星

安齋久英

吊橋を仰ぐ山路や冬うらら  
残照を水平線に冬の雲  
湖暮れてこぼれんばかり冬の星  
明けやらぬ湖逆しまに師走富士  
去年今年八十路の夢の捨て切れず  
夕星や盆の窪より冷え兆す  
恙なき友の筆勢初便り  
暮れなづむ連山の裾冬灯  
極月や忍野八海人まばら  
彩りの加賀麩を椀に三箇日

# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



初夢 西川みほ

銃弾を追うて枯野へ犬走る  
探梅や木椅子の香り新しき  
善き年を乞へぬ手拔や年用意  
賜はりし冬至かぼちやや刃の立たず  
初夢に現れて黄泉路の友二人  
綿雲を褥に富岳初景色  
屋台占むる目なし達磨や初詣

初詣 堺昌子

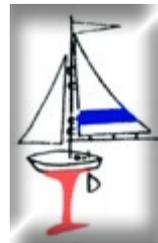
拍手のひびけるあとの淑気かな  
大釜の甘酒に列初詣  
ひんがしの枝より咲きぬ加賀の梅  
だて巻の腕あぐる嫁節料理  
丸顔の祖母似の孫や小正月  
大山のこま参道や冬の百舌  
紅白の千両活けて蕎麦処

師走 吉田きみえ

枯菊の雨の重さを束ねけり  
ゆつくりと曾孫を抱きて冬至の湯  
一齐に船の汽笛や除夜の海  
冬ざれや風筋変はる舫舟  
母の忌や庭の水仙供花として  
持てるだけ持つて師走のバスに乗る  
枯河原小舟傾くまでに朽ち

# 青炎集

## 松本三千夫選



横浜 山咲和雄

二人とて取立ててせぬ年用意

**読初は天声人語音読す**

息白く靴ひもむすぶ手のおそし

予定なき自由時間や冬日和

干支の申墨あざやかに奴風

生きてゐることのうれしき寒さかな

横浜 外山節子

塔頭へ逸れて息継ぐ初詣

恙なく卒寿の夫と屠蘇酌みぬ

初風や相模野の風集めをり

すれ違ふ目が語りをり寒の入

**野より摘み鉢より摘みて七日粥**

まだ炬燵出ぬ間に電話切れにけり

横浜 高橋明

執念の俳句暮しや去年今年

**神鈴をふりて初日を散らしけり**

初句会句に憑れたる顔そろふ

初句会風一つなき日本晴

おだやかなる冬日の続き寒に入る

防寒着脱ぐより早く孫の顔

横浜 山口登

**連風の揚がる尾の先富士の山**

干支の猿七度出合ふ年男

街の灯を伝ひ伝ひて除夜の鐘

書き初めや墨痕滲む蘭亭序

窓拭きの漸う終はる小晦日

笹鳴きに歩みとどめぬ里の道

颯爽と渡航青年漱石忌

ロボットとしばしの会話街師走  
煤掃きの古刹や門に猫たむる  
微笑みの白衣観音初明り  
参道の梅一輪の淑気かな  
ストーブの煙屋根はふ蟹の家

横浜 前原 マチ

大網白里 亀卦川 菊枝

鴉来て光啄む霜の畑  
仕舞湯の初湯なりけり風の音  
幼な子を抱きて初日を拝みけり  
朝の卓七種粥の椀二つ  
人日や短冊を切る紙の音  
**碧落の片雲返つる日和かな**

横浜 早川 八重子

一斉に港の汽笛年明くる  
句心の生れては消ゆる寒さかな  
**短日の水の如くに流れけり**  
路地裏の日差しやはらか冬すみれ  
塩分の取り過ぎ不可と初日記  
日差し浴び春へ備ふる桜の樹

ぞんざいに冬至南瓜の転がさる

地吹雪上げて富嶽の男振り  
扁額は天下禅林淑気満つ  
休耕田の薄ら日つつくかじけ鳥  
**闇踏んで人集ひ来る里神楽**  
寒月下コンクリートの象がゐる

横浜 正谷 民夫

横浜 及川 照子

神杉の香り新たや初明り  
経蔵の校倉造り初明り  
空つ風屋根に石置く御師の家  
三面のいづれも父似初鏡  
**寒牡丹たをやかに身をほぐしけり**  
たまゆらの光と消ゆる雪虫

日野 中村 月代

歳晩の肩のほぐる日差しかな  
**クレインの吊り上げたるか初日の出**  
願ひ事ひとつに絞り初詣  
七十路の初夢空を飛びにけり  
初旅やサミット有りし湖の宿  
六つの花舞ひし露天や時忘れ

# 耕 土 集

## 黒滝志麻子選



横浜 佐々木永子

横浜 重田 修

逆さまの箒の如し枯櫛

冬ざれや野づらを渡る風の音

**その年の自分史きざむ古曆**

本棚の古書の匂ひや煤払

寒風や鯛焼二つ懐に

月に向け終の寒柝打ちにけり

山頂の雪遊ばせて山眠る

人の世の綾なす縁ふぐと汁

初夢や壺中の天に義母の顔  
厚焼のだるま煎餅初大師

相模原 板谷 俊武

本間せつ子

道端に群れて明るき石露の花

切り株に鳥の遊べる冬田かな

廃屋の広き庭なり寒椿

凧をよけむと路地を曲りけり

**夕暮れて鳩の一羽と別れくる**

陽光や玻璃の聳く霜柱

**年の夜や粹なポリスの人捌き**

妄念を鐘で撞き出す年の果

壺乃重の姉妹譲らぬ草石蚕かな

息災と賀状に浮かぶ友の顔

浦安 東 正則

宮地 静雄

初夢の忘れて二度寝仕る

ドクタ―の励まし受くる七日かな

寒鴉ごみ出す吾とにらめつこ

初雀わが家の中を覗きをり

**冬帝の給うて晴の日の多し**

**空冴えて月の切つ先極めけり**

初春の金時山や鉞の音

太鼓の音心突き上ぐ初不動

山里や薄々煙る寒の雨

異国より独り息子や春隣

# 雁渡し

岡野里子

結界の石に凝りたる余寒かな  
梅真白島に源氏の旗印  
藤村の墓や老梅飛竜めき  
鳥引くや岩間にひかる忘れ潮  
点となる沖の釣舟風光る  
遠富士の頂隠れ養花天  
つくしんぼ一声重き黒毛牛  
高階へ色押し上ぐる樟若葉

# 武者人形

小田嶋野笛

獺祭や全て手近に古いの部屋  
ライオンは遠い親類猫の恋  
囀や不動の髪に迦か楼ら羅ら棲み  
春昼の水跳ね散らし鯉の恋  
掃除機を奏づるごとく春の塵  
肘張つて箱より出づる武者人彫  
梅雨寒や父祖伝来の長湯癖  
蛩の一つは行方知れずかな

# 花大根

饗庭 蕙子

白梅や井筒にはづむ雀どち  
山門の仁王眼を剥く余寒かな  
野径ゆく二月の空の果て知れず  
椿落つ夕べの闇を重ねつつ  
山裾の風あまくして桃の花  
迅き雲や潮騒とほき花大根  
堰落つる水閃々と五月来ぬ  
中空に川あるごとし鯉幟

かまくら

大橋弘子

白波の寄するも引くも春の音  
暁好き箒も好きや昭和の日  
葉隠れに白き椿や大石忌  
春の日や勾玉形に猫眠る  
鳥帰る近くて遠き国後へ  
紫陽花や水神祀る染物屋  
叡山の揺らぐばかりの蟬時雨  
峰雲や一礼深く球児去る

青蔦の如く

加藤 榮 一

如月や長谷大仏のうす衣  
菜の花やベンチそれぞれ二人連れ  
口なべてひらく燕や一番子  
老鶯や森のしじまを深めをり  
町中の丈余の芭蕉玉を解く  
紫陽花や群がる傘の色あまた  
青蔦や大樹を這ふにはばかり  
せせらぎの橋の真中や月涼し

# 春の土

佐藤良二

群雀下りきてしばし春の土  
ふれて見る樹齢いくばく梅の下  
春の日や古筆に学ぶ古今集  
仏塔のほとりに生ゆやふきのたう  
をりをりに渡る小橋や水草生ふ  
江の島へひと筋の水脈春逝けり  
水切りを競ふ親子や夏来る  
一編のドラマの余韻新茶汲む

# 瀬戸の里

波多野孝枝

煮 豆 屋 の 吊 り 電 球 や 春 寒 し  
健 脚 に 道 を 譲 り て 青 き 踏 む  
散 り 際 の 強 き 香 放 ち 紅 薔 薇  
齋 の 膳 床 の 間 飾 る 白 牡 丹  
軒 に 吊 り 一 夜 干 す 飛 魚 里 泊 り  
湯 上 り や 漁 火 見 ゆ る 籐 寝 椅 子  
観 音 の 裳 裾 揚 羽 の 見 じ ろ が ず  
墓 洗 ふ 柄 杓 や 杉 の 香 の 立 ち ぬ

明け易し

和田慈子

もの芽や社に對の獅子頭  
水平線余寒の紺を湛へをり  
沖眩しきぶし鈴振る杣の道  
西行に捧ぐる一枝山ざくら  
露天湯や山氣ふるはす時鳥  
笑ひ仏傾ぐ山路や遠閑古  
水音を枕の旅寝明け易し  
小流れに色を深めて四葩かな

# 鬼の子

阿部重夫

七つ目は日暮れとなりて福詣  
縄文の遺跡抱きて山眠る  
草萌や母の背を越す十二歳  
星一つのみ輝くや今朝の寒  
電線に物見の一羽燕来る  
白子干す混じる小海老の色淡く  
石段を跳びて帰る子春夕焼  
鍬一闪旬の筍掘り上げぬ

# 白南風

遠藤清子

引き直す道の白線  
冴返る  
巻き癖の残る二月のカレンダー  
水温む群れて重ぬる鯉の口  
風少し尖りて今日の花見かな  
禅寺にクルスの墓碑や松の花  
濃淡も遅速も花の風情かな  
円相の掛軸寂と風炉手前  
赤牛の阿蘇や芒種の草千里

## マロニエの花

及川照子

花 菜 畑 展 け る 先 の 海 の 青  
菜 の 花 を 散 ら し 昼 餉 の パ ス タ か な  
日 は 西 に 野 遊 び の 児 を 肩 車  
曙 の 光 と け ゆ く 代 田 か な  
マ ロ ニ エ の 花 と 暮 れ ゆ く 銀 座 か な  
さ く ら ん ほ 青 春 の 香 の 喫 茶 店  
夜 濯 ぎ や 遊 び 疲 れ の 心 地 良 く  
強 き 子 に 育 て と 叩 く 天 瓜 粉

# 青葉風

榊山智恵

一湾を見下ろす城址若緑  
亀鳴くや肩剥落の五智如来  
葉巻もつ宰相像や涅槃西風  
水田べり行く草笛のわらべ唄  
桑の実の熟れて疎開の話かな  
燻煙の合掌屋根や青葉風  
山畑の豆の葉叩く白雨かな  
棟上げに撒く祝餅豊の秋

笹 鳴

園 田 惠 子

春 潮 や 港 へ 急 ぐ 大 漁 旗  
船 宿 の 明 け の 賑 は ひ 桜 鯛  
蒼 天 や 一 村 染 む る 梨 の 花  
春 暁 の 釣 宿 灯 り 潮 曇  
連 翹 の 籬 に 添 ひ て 寺 の 道  
舞 台 組 む 鳶 の せ は し げ 汗 滂 沱  
夏 蓬 背 丈 程 な り 古 戦 場  
代 掻 や 谷 戸 の 棚 田 の 動 き だ す

# 古都の冬

今村千年

阿弥陀への長き回廊冬紅葉  
見返りの弥陀の目差小春風  
初時雨インクラインへ坂がかり  
夜もすがら格子戸佇ちぬ比叡風  
鳴瀆に集ふ里人大根焚  
南座に招きの上ぐる師走かな  
顔見世や京の着倒れ紛れなく  
顔見世の跳ねて花見の小路かな

年間優秀賞（平成二十七年）

乙矢集

優秀賞

騒めきは芽吹きのかかし柞山

森清

堯

青炎集

優秀賞

年の夜の闇へ打ち込む法鼓かな

大川

暉美

耕土集

優秀賞

まだ箱にある待春のべびー靴

湊田

則子

特別作品年間賞（平成二十七年）優秀賞

## 富士登山

長尾夕イ

一合目馬返してふ登山口  
二合目を埋むる石楠花風静か  
三合目緑したたる樹林帯  
四合目緑蔭に入り昼餉とす  
五合目や老鶯四方に鳴き交す  
六合目砂礫にそよぐ蓼の花  
七合目西日に染むる小屋泊り  
八合目がれ場の道に汗滂沱  
九合目足に重たき登山靴  
頂上の鳥居くぐるや風涼し  
星飛ぶや隣る寢息を肩に受け  
修験者の法螺貝響く御来迎